

(一般)

子どもたちの学力向上をめざして 一日常づかいの ICT 活用法から、国語科を中心に協働的な学びへー

大阪市立東都島小学校 的場 郁子 西部 隆行
高本 敦子 崔 名都子

1. はじめに

本校では、平成25年度から、「大阪市学校教育ICT活用事業」に係わるモデル校として、その授業プランの作成と実証研究を進めてきた。

当初は、タブレットPCを使ったものの効果的ではなかった場面や、ネットワークやアプリの不具合で、ねらい通りの活動ができず、児童や指導者にストレスがかかる場面があった。そこで、タブレットPCのアプリや機能を簡単な準備で授業の中に取り込む「日常づかいのICT活用法」を意識し実践研究を積み重ねた。

その結果、ICTを活用することで、主に以下のような成果を得ることができた。

○ 学習の効率化

- ・デジタル教科書やタブレットPCの画面を電子黒板に投影することで、簡単に拡大提示できるようになった。
- ・児童のノートを書画カメラで電子黒板に投影したり、タブレットPCの画面を同時に複数投影したりすることで、友だちの考えとの違いを確認したり内容を共有したりすることが簡単になった。等

○ 今までにない授業のデザイン

- ・タブレットPCで撮影したビデオや写真をその場で確認したり学習に利用したりすることができた。
- ・一人1台のタブレットPCで、一人一人が自分の課題にあった学習を進めることができた。等

○ 伝え合う活動の活性化

- ・自分の考えを電子黒板に投影して説明したり、友だちの説明を聞いたりする活動が日常的に行われるようになり、児童は、わかりやすく伝えることを意識して話したり、自分の考えと比べながら聞いたりするようになった。
- ・タブレットPCを見せながら友だちに自分の考えを説明したり、一緒に考えたりする協働的な活動が増え、少人数での話し合い活動が活発になった。
- ・高学年では、キャリア教育をはじめ様々な学習場面で、よりわかりやすく説明するために自分でプレゼンテーションを作成し発表することができるようになった。

○ 日常的なタブレットPCの活用

- ・アプリや機能についての研修や情報交換を重ね、授業に有効なものを探した。
- ・簡単なアプリや機能を日常的に繰り返し使うことで、教師も子どもも操作に慣れることができた。
- ・多くの実践を通して、タブレットPCを効果的に活用できる場面が分かるようになってきた。

○ ICTルーブリックの作成（情報モラルを含む）

- ・高学年になったとき自分で機器や表現方法を選び発信できるようになるため、低学年から順次身につけておきたい内容を学年毎にまとめた。
- ・児童が情報社会を生きていく上で必要な情報モラルをカリキュラム化した。

- ・ルーブリックを作成したことで、それぞれの実践が単元目標の他に 21 世紀型能力を育成するためのどの段階にあるのかを意識して取り組むことができるようになった。
一方、課題も明らかになってきた。

- 21 世紀型能力を育成するためには、協働的な学びによる思考力・実践力の向上が必要である。
- ICT を活用するどのような学習活動においても、全般的な国語力がなければより良い学習にならない。
そこで、本年度から、国語科を中心に研究に取り組むことにした。

2. 研究の内容

- (1) 授業で思考ツールを活用する。
 - ・思考ツールを様々な学習場面で使ってみる。
 - ・内容の対比や文章の構成、人物相関図や登場人物の心情等、国語科の効果が期待できる場面で、自分の考えを思考ツールで可視化する。
 - ・協働的な学びの場面で、自分の考えを説明するときの提示資料として活用する。
- (2) 漢字の読み書きを定着させる。
 - ・朝学タイム（週 2 回）に前学年と現学年の漢字練習をする。→確認テストで成果を把握する。→定着度の低い児童には個別指導をする。
- (3) 児童の読書量を増やす。
 - ・（従前の取り組み）読書タイム、「ひまわり」による読み聞かせ、絵本広場、都島図書館からの集団読書。
 - ・（新たな取り組み）学校図書館の活用拡大、学級文庫の充実、読書スペースの新設、蔵書整理→バーコード化。
 - ・（新たな取り組み）読書貯金の活用→100 冊達成者を表彰する。
- (4) 学習規律を徹底する。
 - ・学習ガイドを設定し、学校・児童・保護者で共通理解する。→研究授業等、授業公開時に相互評価する。
- (5) 家庭学習の時間を確保する。
 - ・家庭学習ばっちりカード（4・5・6 年）で、家庭での学習時間を自己管理する。

3. 研究の成果と課題

- ICT については、高学年の児童は自分の学習目的や場面に応じて選択して活用できる段階にある。ICT のルーブリック（東都島モデル）を基に、思考力・実践力をつけ 21 世紀型能力の育成に努めたい。また、使い方の自由度が増していることに伴い、情報モラルの指導を広め深める必要がある。
- 国語科については、研究を始めたばかりなので、多面的な取り組みで児童の国語力をつけていきたい。
- 思考ツールについては、その活用で効果を期待できる学習場面が多くあることがわかった。まだ、実践数が少ないので、効果的なツールの選び方や使い方を引き続き研究し、最終的には児童が目的に応じてツールを選び使いこなすことを目標にしていきたい。